



右/土壌環境グループの職員の皆さんと。上段中央が小岩グループリーダー。  
左/デスク周りはすっきりと整頓されている。「子供たちの写真を貼る方もいますが、気になって仕事に集中できなくなるのであえて貼らないようにしています」(大西さん)

私の  
仲間  
komachi's  
point

大西 紬子は一九七八（昭和五十三）年、愛知県生まれ。妹と二人姉妹で、事務系の仕事をする両親のもとに育った。自動車が好きで技術系の仕事にあこがれを持っていた父は、「手に職をつけなさい」と娘たちにしきりに話した。そんな父の教えもあり、高等専門学校の学校説明会に参加。服装や髪形が自由で自主性のある校風が受験のきっかけとなった。幼少期からぜんそくを患っていたこともあり、人々の暮らしや公害について学ぶ環境都市工学科への入学を決意する。

「小さい頃は引っ込み思案だったんですが、小学校で学級委員、中学校で水泳部のキャプテン、高専の寮では下級生の面倒を見る指導寮生をしました」

自分の意見を言うてぐいぐい引っ張るタイプではなかったが、周りを俯瞰してまとめあげる、そんなリーダーシップを発揮していた。

高専で五年間学んだ後、環境分野への探求心がさらに膨らみ大学へ編入。実践型だった高専の教育に対して、理論型の教育に最初は苦労もしたが、高専時代とは異なる環境の中でどうやって自分の力を発揮すればよいのか熟考する日々を送る。次第に研究の面白さに気づき、大学院へ進学。環境分野へのめり込んでいった。

就職活動を開始したころ世の中の環境対策は「公害問題」から抜け出し、「エコロジー」という概念を広げる段階にあった。二〇〇三（平成十五年）二月に土壌汚染対策法が施行され、建設業界全体が土壌汚染対策に力を入れ始める。

高専と大学、さらには大学院までの九年間で土木工学、衛生工学、環境工学を学んだことが大西の強みになっていた。

「最初はコンサルやシンクタンクへの就職を考えていたんですが、(株)竹中土木で土壌汚染対策をする大学のOBから話を伺い、ここならこれまでの学びを最大限に活かせると思い、入社意向を固めました」

入社後は新入社員研修の一環として河川改修工事の現場に配属された。言われていることが理解できず、状況を俯瞰したいのにできない状態が続いたことは苦しかったが、腹をくくりとかく吸収することに専念した。

わからないことや気が付いたことは業務ノートに書き留め、上司に報告。コメントをもらうということを繰り返していた。

「四年目で一級土木施工管理技士の試験を受けたときに、そのノートを見返したんです。そうしたらいいことがたくさん書いてある。宝のノートになっていました」

### 「手に職を」父の教えから 高専への入学を決意

### ゼネコンへ入社、 土壌汚染対策のエキスパートへ

輝け!

けんせつ小町

# 技術者 大西 紬子

株竹中土木  
東京本店工事部  
土壌環境グループ



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

ゼネコン（総合建設業）には、現場をまとめる施工管理だけでなく、専門家として現場を支える技術者がいる。今号では、土壌汚染対策法が施行された2003年に入社し、数々の土壌汚染浄化技術の開発や施工に関わってきた土壌汚染対策のエキスパートを紹介する。





グループ内チームペア制を組む本田職員(左)と打ち合わせを行う。進捗を報告し業務を共有することで、急な欠勤や早退があっても仕事への影響を最小限にできている。

## 「目に見える成果は残らない。 残るのはお客様の安心した笑顔」

その後の大西はグループ会社である(株)竹中工務店で技術開発や技術営業などを経験し、力を付けていく。

(株)竹中工務店への出向中に二度の産休・育休を取得。復帰後は(株)竹中土木東京本店工事部土壌環境グループに着任した。ここでは、土壌汚染対策の技術営業から計画、行政折衝、施工管理までの一連の流れを担当している。

自然環境や周辺住民への影響を考慮し、困っているお客様に対して最良の提案をして施工に結び付けることが使命だ。

「汚染を取り除くことが仕事ですから、構造



私の現場  
komachi's point

上/土壌汚染のおそれがある土地の地歴調査を終えると、現場に赴き汚染の範囲を調査する。汚染範囲と深度を把握した後に、ベストな対策技術を提案している。  
下/「現場に行くときは、ヘルメットと作業着をもって移動するので、毎回大荷物です(笑)」(大西さん)

物のように、目に見えた成果は残りません。ですがお客様の安心した笑顔が見れた時は心から嬉しくて。それが一番のやりがいですね」

### 大西さんのようになりたい

土壌環境グループには、大西の他に女性社員が二名いる。二人とも大西にあこがれて入社を決めたということからも人望の厚さが伝わってくる。

その一人である岡本職員は、大西との出会いをこんな風に語ってくれた。

「私が東京農工大学大学院で就職活動をはじ

めてすぐに、大西さんがわざわざ大学の近くまで会いに来てくださって。その時も、チャキチャキ歩いていてかっこいいなと思っていたので、今やっと同じグループで、あこがれの方と一緒に働けていることがとても嬉しいですね」

大西と同様に高専出身で北海道大学大学院を経て入社した、三年目の本田職員も大西から学ぶことが多いという。

「ここに配属されて半年、大西課長の答えの導き方や知識をただただ吸収しています。仕事も子育ても全力で、とてもかっこいいです」

このグループでは「グループ内チームペア制」というユニークな仕組みを実践している。大西のように業務時間に制限のある社員の力を最大限に発揮するため、管理職と一般職でペアを組み仕事をする。この仕組みを考案した小岩グループリーダーがメリットを話してくれた。

「技術や経験があるのに時間に制限がある社員と、時間に融通が利く若手社員がペアを組むことで互いの長所と短所を補い合い、スムーズな業務を目指しています」

大西は本田職員とペアを組み、気持ちがとても楽になったと話す。

「あれもしなきゃ、これもしなきゃと思うことが負担になるんですね。それが本田さんと共有できていると思うと、だいぶ肩の力が抜けました」

今年三月に発表された日建連の「けんせつ小

### komachi MEMO

「子供たちに昼寝をしてもらうために、休日は朝からあちこち出かけて身体を動かしています。子供が3歳になるまではスイミングスクールで私も一緒に泳いでいたんですよ。子供たちと一緒に遊ぶ時間が一番のストレス発散ですね」



profile

おおにし・じゅんこ◎1978(昭和53)年、愛知県生まれ。豊田工業高等専門学校から京都大学工学部地球工学科へ編入。京都大学大学院を経て、2003年4月に(株)竹中土木入社。現場監督を経験し、技術系の部署に配属。2008年8月より(株)竹中工務店土壌環境エンジニアリング本部に転出。その間に2度の産休・育休を経て2014年5月より現職。

これから産休に入る岡本職員(左)。「以前から出産時の休暇制度はありましたが、大西さんのように技術系総合職で利用している方がいなかったら不安を感じていたかもしれませんね」(岡本職員)

町活躍推進表彰」で、この「グループ内チームペア制」が優秀賞を獲得した。

これから入職するけんせつ小町へ

制度や仕組み以外に仕事と子育てを両立させる秘訣はあるのだろうか。

「両立をしようとしなくていいことです。仕事の際は全力で仕事をし、家に帰れば全力で母親をする、あえて言うならそのスイッチの切り替えですかね」

周囲の助けがなければ成り立たない。感謝の心を忘れず、仕事も子育ても笑顔で後悔しないよう懸命にこなす大西に、周囲が惹きつけられる。

「女性には体力とか出産とか、男性との差はありますが、どの業界も仕事の取組み方に違いはありません。性別を理由に就職をあきらめる必要はないですし、建設業界にも女性ならではの考え方が必要とされてきているので、心配せず、前向きに志望してもらいたいですね」

この業界に入ると決めたとき、もう腹をくくっていましたがと明るく笑う大西の姿に、周囲もつられて笑っていた。

女性のみに着目し、制度や仕組みを構築するのではなく、そこに関わる全員が同じようにフォローし合える環境をつくる。それが社員一人ひとりが輝く職場をつくる、第一歩なのかもしれない。